

知識探訪

多民族社会の横顔を読む
協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

マラヤ共産党書記長陳平の死

東條哲郎（立教大学兼任講師・東京大学人文社会系研究科研究員）

2013年9月16日、マレーシア成立50周年の祝祭ムードに包まれていたこの日、バンコクで一人の老人が亡くなりました。マラヤ共産党書記長の陳平(Chin Peng)、享年90歳でした。陳平の死に際し、スランゴール州のスルタンが、陳平は国家に対する反逆者であると発言するなど大きな話題となったので、ご記憶の方も多いかと思えます。

1924年、ペラ州に生まれた陳平、本名王文華(Ong Boon Hua)は1940年にマラヤ共産党に入党しました。折しも、華人社会を中心に抗日運動が活発となっており、1941年12月に日本軍がマレー半島に上陸して占領を開始すると、陳平は同党が組織したマラヤ人民抗日軍(MPAJA)の中央軍事委員として抗日ゲリラを指導しました。戦後イギリスが復帰すると、MPAJAはイギリスとの協調路線を模索し、1945年12月に解散しました。

しかし、戦後の冷戦体制下で、イギリスとマラヤ共産党の対立は徐々に高まっていきました。1947年、陳平はマラヤ共産党の書記長に就任しましたが、この時期、マラヤ共産党の活動がイギリスの弾圧で行き詰まり、1948年6月にマラヤ共産党は武装闘争路線に転換しました。これに対し、政府は非常事態宣言を発令し、マラヤ共産党を非合法化し、鎮圧に乗り出しました。マラヤ共産党の活動は徐々に困難となり、1955年に和平会議が決裂すると陳平は公の場から姿を消し、1961年に中国に脱出し、中国から武装闘争を指導しました。闘争が行き詰まる中、1980年代初頭から陳平は政府との話し合いを模索し、1989年、南タイのハジャイで和平協定が成立し、マラヤ共産党の武装闘争が終わりました。

和平成立後、陳平はマレーシア帰国を禁じられ、タイを中心に生活していました。陳平は近年、死ぬ時は祖国マレーシアで死にたいと度々訴えていましたが、軍や警察幹部などの強い反対のため、帰国が認められないままバンコクで客死することとなりました。当時の警察幹部の一人、ユエン氏(Dato' Seri Yuen Yuet Leng)は、その自伝的著作において、自身の生い立ちや教育、対共産ゲリラとの戦闘を詳述した後、彼自身が身命を賭してマラヤ共産党から守った国とは何かということを論じています。平和的独立を果たしたマレーシアにおいて、軍や警察で前線に立っていた人々はマラヤ共産党鎮圧での貢献を非常に重視しており、マラヤ共産党の指導者であった陳平の帰国を認めることは出来なかったのです。

2000年代に入り、陳平を含むマラヤ共産党幹部などから、その思想や活動についての書籍が発表され、中にはマレー人左派の人々を書いたものや彼らの事跡を記したのも出版されています。これにより、マラヤ共産党や左派が必ずしも華人のみの集団ではなく、他の民族の人々も関わっていたことが再認識されるとともに、政府に対立していた人々もマレーシアに対する愛国の念は変わらず、その上で、自身の思想・信条に従い行動したのだと再評価する声が出てきました。近年では、2011年に野党全マレーシア・イスラム党(PAS)の副総裁補モハマド・サブが、プキッ・クポン事件のリーダーであるマラヤ共産党のマット・インドラはイギリス植民地統治に対する抵抗運動の真の英雄であると発言をしました。プキッ・クポン事件とは、1950年2月23日未明、武装したマラヤ共産党のゲリラがジョホール州ムアル近郊のプキッ・クポン警察署を襲撃した事件です。この事件の首謀者を、野党指導者であるモハマド・サブが英雄であると評価したことに対し、ナジブ首相を筆頭に与党政治家が反応し、警察側遺族がモハマド・サブに対して名誉毀損で訴訟を起こすなど、大きな話題となりました。

マラヤ連邦独立から56年、マレーシア成立から50年が経ち、当時の人々の事跡を残すことが急務となっていることは言を俟ちませんが、マレーシアにおいて誰が独立の英雄なのかというテーマは、マレーシアの現代政治・社会を強く反映し、未だにしばしば与野党幹部から発言がなされています。ただし、陳平が最後まで帰国することができずバンコクで客死したということ自体が、国論を二分する与野党の論争的とならないし、陳平の死が左派の動きを活発化するという現代政治を動かす要因になるとは考えにくく、その意味で、陳平の死は、戦後史の一つの時代が過ぎ去ろうとしていることを示していると言えるでしょう。

< 筆者紹介 >

1979年東京都生まれ。立教大学兼任講師。文学博士。東京大学大学院、在マレーシア日本国大使館専門調査員を経て現職。2004年から06年までマラヤ大学歴史学科に留学、09年から13年3月まで大使館勤務で、それぞれマレーシアに長期滞在。専門はマレーシア近代史(錫鉱業史)。この記事の問い合わせは、tetsutojojp@yahoo.co.jpまで。